書評四

中東史への気候史の導入とその反応

―リチャード・W・ブレット『初期イスラーム期イランにおける綿花・気候・ラクダ』

長瀬篤音

書評

Richard W. Bulliet, *Cotton, Climate, and Camels in Early Islamic Iran: A Moments in World History* (New York: Colombia univ. press, 2009)

イスラーム社会史、特に前近代イランを専門とし、人獣関係史や技術史にも造詣の深いリチャード・W・ブレットがハーバード大学ヤールシャーテル講座で行なった一連の講義を元に執筆したのが本書（邦題『初期イスラーム期イランにおける綿花・気候・ラクダ：世界史の一幕』）である。

ブレットがはじめにで述べるように前近代中東史には史料や古気候学などのデータの少なさから気候史や環境史が成立しづらい土壌がある。例えば、イランの環境史の先駆者であるクリステンセンはここ一〇〇〇年に渡って中東の気候が不変であると見なしており、セルジューク朝史の大家であるボスワースは気候変動をイランへのオグズの侵入の主要因と見なすような議論に懐疑的であった[1]。つまり、ブレット以前の前近代中東史では気候や環境の変化が歴史に与えた影響は十分に考慮されてこなかったと言えよう。

こうした状況下にあって、気候変動の歴史への影響を大いに論じた本書は中東史に気候史を導入した嚆矢的作品である。そこで、本書評では本書の内容とともに中東史家が本書に見せた反応を紹介し、ブレットが持ち込んだ気候史という概念が中東史において如何に受容されたかを概観したい。

本書の章構成は次の通りである。

第一章：如何に綿花ブームを判別するか（How to Identify a Cotton Boom）
第二章：イスラームと綿花（Islam and Cotton）
第三章：大寒冷（The Big Chill）
第四章：テュルクとラクダの（Of Turks and Camels）
第五章：世界史の一幕（A Moments in World History）

第一章：如何に綿花ブームを区別するか

まず、ブレットは本書を貫く二つのテーゼを提示する。一つ、イランが九―一〇世紀に迎えた経済的・文化的隆盛は「綿花ブーム」Cotton Boom に支えられたこと、二つ、一一世紀には綿花ブームは退潮し、同時期にイランへのテュルク系遊牧民の流入と知識人のイラン外への流出が発生し、その背景に一世紀以上継続した深刻な寒冷化、彼曰く「大寒冷」The Big Chill という気候変動が存在したというものである。まず、本章では第一テーゼである綿花ブームという耳慣れない言葉が如何なるものかを論じる。

本章における議論は専ら定量分析の結果に依拠しており、例えば人名辞典や地方史に記載されるウラマーのニスバや、地方史記載の税目録に見られる課税地の名称などに着目した分析がなされ、次のような結論が得られるという。

ブレットは綿花ブームを九世紀初頭にイラン高原内陸部に拡がる山麓地帯で始まった綿花栽培の流行であると定義する。綿花は従来荒蕪地として見放されていた乾燥地にカナートを新規に開削して生まれた農村群で主に栽培され、それら開拓村は開拓者のリーダーの名前を冠した「何某アーバード」*fulānābād* を村名にする特徴があった。更に、ブレットは「何某」の傾向を分析することで開拓ラッシュがブームに先立つ八世紀末から九世紀初頭に起きていたことを明らかにし、当時人口の半数を占めるに過ぎなかったアラブ人や改宗イラン人などのムスリムが綿花栽培の殆どを担っていたことも判明させた。

第二章：イスラームと綿花

山麓地帯で生産された綿花はバグダードへ輸出されることで莫大な富をイランにもたらし、都市化とイスラーム文化の発展に寄与した。では、何故絹や羊毛ではなく綿花が

選ばれ、栽培されたのであろうか。ブレットはその理由がイスラームと綿花の高い親和性にあると考えた。華美で旧支配者であるササン朝を想起させる絹の着用をムハンマドがハディースの中で禁じる一方で綿製の白衣の着用は推奨しており、この点で綿はイスラームの信仰に適っていた。更に、ブームの立役者である改宗ムスリムにとって綿の着用は当時少数派であった自らと多数派非ムスリムを区別するアイコンとしても機能していた。つまり、当時のイランにおいて綿とはイスラームであり、ムスリムのアイコンとは綿の着用であったというのである。

ブレットは征服から綿花ブームの終焉に至る七―一〇世紀のイランを概括する。自給的な農業と農村を基盤としたブーム以前のイラン社会は綿花ブームによって九世紀以降急速かつ顕著な都市化を果たした。無主の荒蕪地を私有化できる法的根拠、可耕地化するカナートの技術、綿花の高収益そしてイスラームが綿花ブームを促進した。しかし、一一世紀を迎える以前から、綿花ブームは陰りを見せつつあった。農村から人口を吸い上げる形で発展した急速な都市化は食糧生産に支障を来たし、次世紀の食糧危機の萌芽となっていた改宗の完了は綿花産業にとって新規の顧客を獲得する機会の喪失を意味し、その成長も頭打ちとなった。そして、イランにおけるアラブの権威はアッバース朝の衰退とともに低下し、アラブのモードに合わせて綿を着用する意味も薄れ、綿＝イスラームであった時代は終わりを迎えたのである。

第三章：大寒冷

ブレットは綿花ブームの終焉とオグズの侵入の背景には寒冷化現象が存在すると仮定し、その現象に大寒冷と名付けた。それはイランをはじめ周辺地域が一〇世紀前半に深刻だが散発的な寒冷化を経験し、一一―一二世紀にかけて長期的な寒冷化を再び経験したというものである。彼は年代記や旅行記に見える数件の厳冬の記録だけでは当時の古気候を再現することは難しいと前置きした上で、年輪年代学から得られた古気候の再現とすり合わせることで大寒冷を証明していく。

それにあたって、彼はハンガイ山脈西北部で採集された年輪データからダリーゴらが再現した当時の気温を利用する。この研究は採集地周辺の気温が一〇世紀の内九二〇―九四三年を除いて温暖であり、一一世紀初頭に急速に寒冷化すると一二世紀の末まで寒冷であったことを示すものであった。[2] そして、ブレットはモンゴルとイランの冬がシベリア高気圧に支配されることを根拠にモンゴルで観測された寒冷化現象がイランにも発生したと結論づける。大寒冷

の存在を確信したブレットはこの時期の中東の気候を「中世温暖期」ではなく、むしろ「中世寒冷期」と呼ぶべきではないかと提唱する[2]のである。

第四章：テュルクとラクダの

ブレットは綿花ブームの終焉に留まらず、テュルク系民族の西アジアへの初の移住であるオグズのイランへの侵入という世界史的事件を大寒冷を用いて説明しようと試みる。彼は侵入以前のオグズが史料上で「ラクダ飼い」*sārbānān* と呼称されることに着目し、彼らは専らにラクダを飼育した遊牧民であり、その品種がアラビア半島原産の寒さに弱いヒトコブラクダであったことまで突き止めた。更に、セルジューク家はフタコブラクダのオスとヒトコブラクダのメスを交配させ、繁殖能力を持たないが駄獣として非常に優秀で高値で取引されたブフト *bukht* と呼ばれる交雑種を得る技術を持っており、その優良品種を彼らの夏営地であり、シルクロード交易の要衝でもあったブハラに卸すことで莫大な利益を得ていたと主張する。

大寒冷の発生は寒さに弱いヒトコブラクダの成育に致命的であり、セルジューク家にとっては自らの経済基盤である交雑種の繁殖を大いに脅かすことであった。故にオグズはヒトコブラクダを守るためにその成育に適した地域に移住する必要に駆られ、寒冷化したカラクム砂漠北端を離れて、より暖かい南端へ向かったのである。つまり、オグズの侵入は避寒目的の避難であったとブレットは主張するのである。

避寒を目的に移住した結果生まれたセルジューク朝は従来のイランの王朝が基盤とした農業ではなく、交易を重視した。同朝は悪化する一方の農業を省みず、シルクロード交易に一層注力することで農業の不振とは裏腹の文化的・経済的繁栄を築いた。しかし、文化と農業経済の担い手であるウラマーたちは、綿花産業の零落と都市の荒廃の中で、イラン周辺地域への移住を選択していった。

第五章：世界史の一幕

農村と農業を基盤とした九世紀までのイラン社会は綿花ブームによって急速な都市化を遂げ、その綿花ブームはイランの都市文化を育んだ。綿花ブームが支えた繁栄は大寒冷によって損なわれたが、一方で大寒冷はオグズの侵入とセルジューク朝の誕生という新時代到来の端緒となった。しかし、大寒冷がイラン社会に残した爪痕は大きく、その甚大さは大寒冷が終了し、気候が回復した後も都市の荒廃と文化の低調が一五世紀に至るまで回復しなかったことからも窺える。

ブレットはイランの発展が世界史に与えた五つの影響を次のように論じる。一つ目はその経済的発展が東地中海に比肩するものとなったことで、アッバース朝の心臓部たるメソポタミアが北アフリカから中央アジアに跨がる巨大経済圏の中心となったことであり、二つ目はその発展がイランの政治的・文化的プレゼンスの上昇をもたらし、それは数世紀にわたって東地中海を凌駕するものになったことである。三つ目の影響はイランの生活様式を都市を基盤とするものに一変させ、それを不可逆なものとしたことである。四つ目は発展によって涵養された新ペルシア語が大寒冷による知識人の域外への流出とともにイラン周辺地域へ拡散し、巨大文化圏であるペルシア語文化圏形成の素地となったことである。五つ目は衰退が九―一一世紀にかけてスンナ派の牙城であったイラン宗教社会を切り崩し、シーア派に代表される現在のイランのイスラーム信仰の諸要素が入り込む余地を与えたことである。

ブレットはこれら五つの影響を生み出した時代を「イラン開花の一幕」Iran's moment of efflorescence と名付けた。彼はブローデルの三つの時間区分を区別することなく渾然一体に包摂するものと「一幕」a moment を定義し、世界史的意義を有するこの一幕こそが意義深く、回顧されるべきものだとして本書を締める。

本書への反応

ブレットが本書で成した一連の主張、特にテュルク系民族の西アジアへの移住という時代の画期を「大寒冷によって家畜の生育を脅かされたオグズが起こした避難」と説明したことはオグズ史、セルジューク朝史に大きな波紋を投じた。東地中海史が専門のエレンブルムは自著の中で大寒冷に全面的に依拠し、寒冷化した草原に住むオグズが厳冬が発生する度に西へ西へと移住を繰り返し、最後に辿り着いた東地中海世界の秩序を崩壊させたと主張した[3]。しかし、ブレットの大寒冷には問題点も多く、エレンブルムのように即座に首肯出来るものではない。では、大寒冷とその影響にどのような批判が成されてきたのであろうか。

セルジューク朝初期史を専門とするピーコックはブレットが大寒冷の根拠の一つとするバグダードの厳冬の記録に言及し、厳冬は九―一一世紀の間に定期的に記録されており、その発生頻度は大寒冷が本格化する一一世紀の初頭であってもその頻度に特段の変化はなかったこと、つまり、文献史料からはバグダードでの急速な寒冷化は確認出来なかったことを指摘する。一方で、古気候学の研究を複数参照して当時の中東の気候が大寒冷とは真逆の温暖湿潤であった可能性も示唆する。更に、ピーコックはオグズの侵入を避難と見なすブレットの主張にも懐疑的である。オグズ

のように気候変動に晒された遊牧民は移住よりも環境への適応をまず選択するものであり、故地ホラズムはセルジューク朝末に至るまで有力な放牧地であった。このことから、ピーコックは当時の気候変動は彼らに適応可能な程度であり、気候変動だけでは移住を説明できないと述べる。[4]

前近代中央アジア史が専門のパウルはピーコックよりも一歩踏み込んで、大寒冷とオグズの移住を巡るブレットの議論を真っ向から批判し、否定する。[5] まず、彼は侵入以前のオグズが何のために移動していたのかを論じるために、『セルジューク・ナーマ』などに見えるオグズの季節移動のパターンを検討する。そこからはオグズが冬営地をブハラ西方一〇〇キロのヌーリ・ブハラ一箇所に定める一方で、時局とその時所属した勢力に応じてザラフシャン渓谷、カシュカ・ダリヤ渓谷、ホラズムの三地域を夏営地として使い分けていたことが見えてくる。夏営地の所在が一定でないことには中央アジアにおけるオグズの地位の不安定さが反映されており、オグズが夏営地の獲得に汲々としていたことが分かる。つまり、パウルは侵入以前のオグズの移動が避寒目的の避難であったことを否定し、より良い夏営地の獲得が主眼であったと述べるのである。

次にパウルが否定するのはオグズがラクダを専門に飼育する「ラクダ飼い」であったという主張である。ブレットはオグズが史料上で「ラクダ飼い」と呼ばれていること一点で彼らがラクダ専業の遊牧民であったと主張したが、パウルはブレットの主張はオグズが史料上で「ヒツジ飼い」や「数千の馬の主」と表象されている事実を無視しており、ラクダとウマをそれぞれ数頭と数一〇〇頭のヒツジをオグズが献上した記録からもオグズがラクダ専業であったとは考え難いと指摘する。また、ブレットはセルジューク家がブハラに卸したブフトなる交雑種のラクダが他種より価値が高かったと主張したが、パウルはそもそも当時の家畜の相場はおろか取引の記録すら存在せず、ブフトが他種より高値であったことはできないと述べ、彼の説を退ける。

そして、パウルはブレットの議論の中核である大寒冷そのものの存在を否定していく。ブレットは西アジアの寒冷化現象である大寒冷をそのままオグズの故地である中央アジアの気候と見なした。このような気候の地域偏差を無視する姿勢を批判して、パウルは一一世紀の中央アジアの気候の再現を試みる。彼が用いたアラル海の水位の研究[6]からは当時大寒冷のような冬の急速かつ激しい寒冷化は確認されず、むしろ冷夏と乾燥化が顕著であった事が判明している。つまり、中央アジアに大寒冷は存在せず、従ってオグズの移住が大寒冷に由来するというブレットの議論は最初から成立しないと結論づける。只、パウルは気候が歴史に

与えた影響を完全にするわけではなく、気候が与える影響はあくまで間接的なものと捉えるべきで、オグズの移住に関しては従来通り政治に原因を求めるべきだと主張する。

以上、本書への反応を二例だけだが紹介した。彼らは大寒冷を否定し、気候変動をオグズのイランへの侵入の直接的な原因とみなすブレットの主張に懐疑的であったが、両者ともに気候変動が歴史に与えた影響は否定した訳ではなかった。これは気候変動の影響を等閑視してきたブレット以前の研究と比べれば大きな進歩であり、気候史を中東史の俎上にあげた本書はやはり意義深い作品である。

興味深いのは大寒冷を否定したピーコックとパウルが描く古気候は前者が温暖湿潤を想定するのに対して、後者は寒冷乾燥を想定しており、それぞれ異なることである。両者が依拠した史料はほぼ同一であるから、この違いは彼らの古気候学の研究成果の利用の仕方に原因を求めるべきであろう。我々人文系の研究者が古気候学などの自然科学の成果を利用する際に、その出来の好悪や自らの利用方法の正否を判断するのは難しい。只、これは自然科学系の研究者が人文学の成果を利用する際にも言えることである。故に、これからの気候史には文理を問わない研究者が協働し、双方がその成果の利用方法を確認し合える体制を構築することが欠かせないと愚考するばかりである。

【付記】

なお、本書評は科学研究費助成事業「「一四世紀の危機」についての文理協働研究」（21H00555）の枠内で行った筆者と諫早庸一氏との読書会の成果である。文責は筆者が負うものであるが、拙い読解を訂正する労を執り、貴重なご意見までくださった氏にはこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

註

(1) Clifford Edmund Bosworth, *The Ghaznavids: Their Empire in Afghanistan and Eastern Iran, 994-1040*, Edinburgh, Edinburgh univ. press, 1963, pp. 222-223; Peter Christensen, *The Decline of Iranshahr: Irrigation and Environments in the History of the Middle East 500 B. C. to A. D. 1500*, Copenhagen, Museum Tusculanum press, 1993, pp. 11-12.

(2) Rosanne D'Arrigo, et al., "1738 Years of Mongolian Temperature Variability Inferred from a Tree-Ring Width Chronology of Siberian Pine", *Geophysical Research Letters*, vol. 28-3, 2001, pp. 543-546.

(3) Ronnie Ellenblum, *The Collapse of the Eastern Mediterranean: Climate Change and the Decline on the East, 950-1072*, Cambridge, Cambridge univ. press, 2012.

(4) Andrew Charles Spencer Peacock, *The Great Seljuk Empire*, Edinburgh, Edinburgh univ. press, 2015, pp. 287-289.

(5) Jürgen Paul, "Nomads and Bukhara: A Study in Nomad Migrations, Pasture, and Climate Change (11th Century CE)", *Der Islam: Zeitschrift für Geschichte und Kultur des islamischen Orients*, vol. 93-2, 2016, pp. 495-531.

(6) Hedi Oberhänsli, et al., "Climate Variability during the Past 2,000 Years and Past Economic and Irrigation Activities in the Aral Sea Basin.", *Irrigation and Drainage Systems*, vol. 21-3-4, 2007, pp. 167-183.

（北海道大学文学院博士後期課程）